

## 古池（夜叉ケ池）の探索

奥野 宏\*  
山田 成剛\*\*



夜叉ケ池の北東 500 m、海拔 1000 m の地点にレンズ状の湿地がある。この湿地は地元の人々の間で古池とか元池とか呼ばれている。名前から考えると昔は水を満々と湛えていたとも想像されるが、さだかではない。

今ではこの湿地の所在でさえ多くの人々に知られていない。

昭和 51 年 8 月 2～3 日、私共と地元の高校生十数名で、この湿地の簡単な測量を行い、またこの湿原周辺の植物を採集しましたので報告いたします。なお植物については、同行された渡辺定路先生（武生高校）に同定をしていただきました。紙面をおかりして厚くお礼申し上げます。

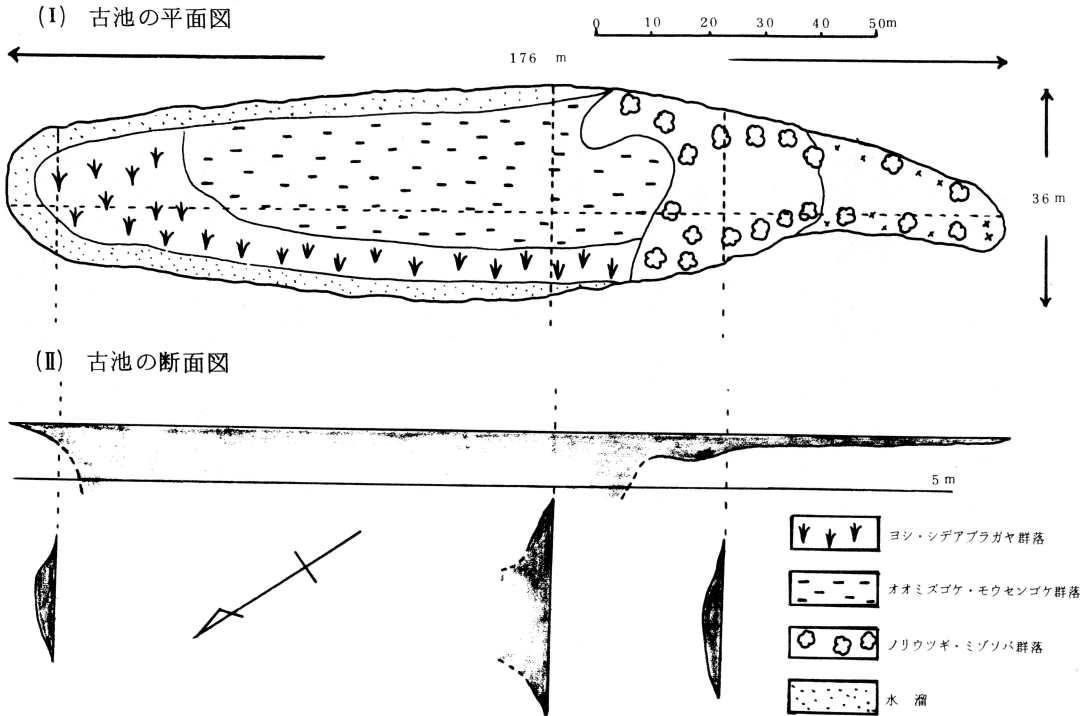
この湿原は、夜叉ケ池の北東、竜神の碑左側、ササの間の小径を 70 m ほど登りつめると、小径は東に向う下り道になる。ゆるやかな傾斜の谷あいをも右へ右へと下って行く。その間、谷が 2 条この径を横ぎっているので、踏み固められた小径を見失わないように 500 m ほど下ると沼田のような湿原に降り立つ。5 月初旬には、この部分には水が 1 m ぐらい溜り沼の形状をなしているが、夏の季節は沼田のようで、沼の影はまったくない。この地点から、東へ約 15 m ほど進むと、一見平原のような、オオミズゴケ、モウセンゴケ、ミツガシワの群落が開ける。

この群落は、湖面に浮島となって浮いているもので、この上を歩くと、周囲の群落も大きくゆれ動き、足元には水が湧き出してくる。

測量の結果、古池の形状はⅠ図のようなレンズ状で、南西端がやや曲っている。長径 176 m、最大幅（南東～北西）36 m。

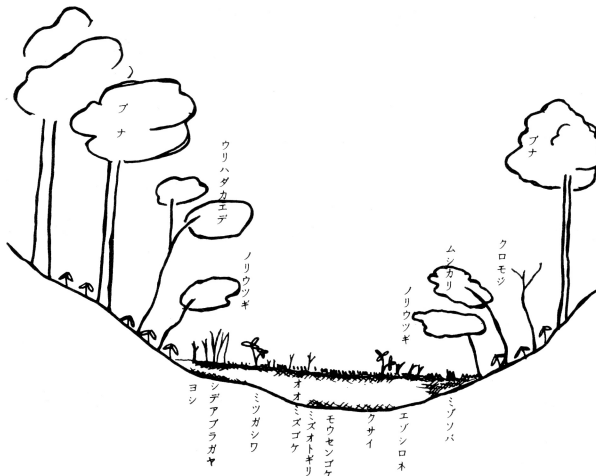
また沼底の形状について調査を試みたが、沼は想像以上に深く、中央部は準備した 5 m の鋼鉄線では測定不能であった。結果 1-Ⅱ図。

図1 古池の測量と植生



池周辺の植物相を概観すると、ブナの原始林の中に沼地の生活型を持った群落が形成されている。ブナ林からはその先鋒隊ノリウツギ、ムシカリ、ウリハダカエデ、ミヤマハンノキなどが沼を取り囲み、次第に侵略を始めている。模式図に示すと(2図)となる。また池全体について細かく見るとこの群落は3つの型に分けることができる。(1図)

図2 古池周辺の群落構造図



第1は南西部の陸地化がぐんと進んでいる区域で、ノリウツギ、ムシカリのような低木が池の周辺から入りこみ、その下植えには、ミゾソバの群落が見られる。第2は中央部のオオミズゴケ、モウセンゴケ群落。この中にはミツガシワ、エゾシロネ、ミズオトギリが見られる。第3は、北東部のヨシ、アブラガヤ群落で草丈は1 mから1.5 mにおよぶ。なお、周辺部の水溜や中央部の小池には、ヒルムシロなどの浮葉植物が見られた。

湿地内の植物

オオミズゴケ	シデアブラガヤ
モウセンゴケ	ヒルムシロ
エゾシロネ	
ハウチャクソウ	ノリウツギ
クサイ	ムシカリ
ミツガシワ	ウリハダカエデ
ミズオトギリ	サワフタギ
ホタルイ	ミゾソバ
トキシウ	
イトイヌノヒゲ	
ヨシ	

湿地周辺域の植物

ブナ	ヤマモミジ
オオバクロモジ	テンニンソウ
アカイタヤ	ツノハシバミ
フウリンウメモドキ	キジムシロ
ゴトウズル	ノアザミ
ミヤマトウバナ	ミズキ
ハウチワカエデ	コバノトネリコ
ウワミズザクラ	ミヤマカタバミ
シナノキ	ネガマリザサ
クロズル	ヒメシダ
ハクサンカメバヒキオコシ	



次に池の形状から、この池の変移を考えると次のようになる。北東↔南西に伸びるゆるやかな谷間の北東の出口にあたるどころが埋めたてられた。以前にはこの沼の上方三周ヶ獄からの数条の谷と地下水により豊富な水をたたえていたものと思われる。

その後、上部南側の急斜面の谷の侵食により谷道が変わり、水の補給が劣ると共に、沼の周辺部

からの腐食土が流れ込み、これに伴って、水生植物が囲りから中央部に生育をはじめたものと考えられる。特にミツガシワは互いに太い根をからませて沼の中に侵入し、その根の周辺に泥をあつめる。

次にヒルムシロのような浮葉植物や沈水植物がどんどん群落を形成し、年ごとに沼をうずめてゆく。これらの植物の遺体は標高1000 mの寒冷な気候のため腐敗分解が充分に進まず堆積を進行する。

このように沼の底が浅くなると、ますます水生植物の生育をうながし、いきおい沼は湿地へと変遷していった。水生植物で埋められたところへは、アブラガヤ、ヨシなどイネ科の植物が侵入している。

現在の古池は、この段階にあたる、すなわち、表面が平らな低層湿原の典型的なタイプである。

古池を歩いて見ると、湿原のあちこちに沼のなごりが見られ、表面は植物で覆われているが、底の方には水の層があり、棒でついて見ると、表層 50 cm～1 m は手ごたえのある層であるが、その下部は柔かく、容易に棒は入り、泥水の層のあることがうかがわれる。

また湿原の中央部は次第に酸性化し、オオミズゴケ、モウセンゴケの目立つ区域が生じている。( 年老いた木樵は「夜叉ヶ池の奥には古池があり、そこには、ハエや動物を好んで食べる不思議な植物が多く住んでいる」と気味悪げに教えてくれた。 )

また、この湿原の特色として、湿原の周辺に岸から 5 m の水路が開けている点である。これは、長野県の八島ヶ原湿原のように、湿原中央部からの排水路とも見られるが、私はこの地域の特色となる雪が周辺から中央部に押すため、この部分の表面の泥炭層は中央部に押され、植物の生育が見られず、水の水路となっているものと考え。

以上の報告は、測定、植生調査においても精度を欠くところがあり、今後湿原の遷移を調査していくには、不完全なところがある。近いうちに徹底した調査を行い、この低層湿原の遷移を記録したいものである。

最後に、この湿原が夜叉ヶ池とともに心ない人達により破壊されないよう大切に保護されることを心から願いたい。

\* 今庄中学校 教諭

\*\* 福井工業高等専門学校 学生